

## 高知県病院薬剤師会

# 県が一丸となり創意工夫で 魅力ある“ふるさと実習”を実現。

薬剤師の地域偏在解消を図るため日本病院薬剤師会（以下、日病薬）が提唱する“ふるさと実習”は、薬科大学、薬学部のない県の出身者がふるさとの医療機関で実務実習を行える制度として期待されている。高知県では、2010年から、受け入れ要件を満たし同制度に賛同する9施設が実習生を受け入れている。高知県病院薬剤師会が中心となって推進する、同県の“ふるさと実習”の現在についてレポートする。



高知大学医学部附属病院薬剤部副部長／  
高知県病院薬剤師会常務理事・薬学教育研修委員会委員長  
**市原 和彦**先生



高知大学医学部附属病院薬剤部薬学教育担当専門員／  
高知県病院薬剤師会薬学教育研修委員会委員  
**楠瀬 正彦**先生

### 毎年30名以上が参加する 高知県の“ふるさと実習”

日病薬の提唱により基本理念が広く賛同された“ふるさと実習”だが具体的な実施にあたっては、導入から4年を経た2013年においても試行錯誤の状態であり、都道府県ごとに実施内容や取り組みの姿勢に違いがあるようだ。

そのような中、高知県では高知県病院薬剤師会が中心となりきわめて積極的な取り組みをしている。2013年には参加施設にアンケート調査を行い結果をまとめ、実習内容のさらなる標準化の必要性を示している。

高知大学医学部附属病院（以下、高知大学病院）薬剤部部長であり、高知県病院薬剤師会会長を務める宮村充彦先生が、高知県での“ふるさと実習”について解説してくれた。「“ふるさと実習”導入以降の3年間を振り返ってみると、毎年コンスタントに30名以上の薬学生が高知県に帰郷して病院での実務実習を行っており、私たちがこの制度に込めた願いや情熱が多くの人たちに理解されている手応えを感じています」（宮村先生）

県内に薬科大学、薬学部がなく、薬剤師をめざして県外に出た薬学生が出身地の病院での実習を通して実

務を学び、将来、故郷で医療に従事するイメージをふくらませることができる。このすばらしい制度の特色を生かすことができれば、薬剤師の地域偏在解消に役立つとされているが、実施状況に関しては全国的な足並みがそろっているとは言い難いのは前述したとおり。高知県が、導入当初から順調に制度運営できている秘訣はどこにあるのだろうか。

高知大学病院薬剤部副部長で、高知県病院薬剤師会薬学教育研修委員会委員長を務める市原和彦先生が解説する。

「県をあげての取り組みができている、参加施設間のコミュニケーショ



高知医療センター薬剤局局長／  
高知県病院薬剤師会副会長  
**服部 暁昌**先生



近森病院薬剤部部長／  
高知県病院薬剤師会常務理事・薬学教育研修委員会委員  
**筒井 由佳**先生

ンが密であるといった点が挙げられると思います。

高知県は、全国に16ある『薬科大学、薬学部のない県』のひとつで薬剤師確保に関する危機感は県内関係者の間で長く共有されてきたものです。そのため高知県病院薬剤師会会員も常に前向きに、主に薬学教育研修委員会が中心となり、実習や研修に関して熱心に活動してきました。

一環として、薬学教育6年制の実務実習カリキュラムにおいて同制度が提言される以前の4年制時代から県独自の制度としてほぼ同様の薬剤師の実習を運営していました。高知県出身の薬学生をふるさとに受け入れるプログラムの運営経験がすでにあったことも、“ふるさと実習”の

定着に寄与したのでしょうか」(市原先生)

### 施設ごとに特徴が栄える さまざまな実習の内容

今回は参加施設のうち、高知大学病院、高知医療センター、近森病院から担当の先生方が取材に参加してください、各施設の実習内容について、うかがった。

まずは、高知医療センター薬剤局局長であり高知県病院薬剤師会副会長を務める服部暁昌先生に同院の実習の特徴について解説いただいた。「高知県・高知市病院企業団立である当院は、“ふるさと実習”の目的のひとつである、地域医療の実際を学び、地域完結型の医療を体験する

部分を強く意識しています。

特に地域医療連携の病診連携に関しては、薬剤師が大いに活躍できる分野だと思いますので、よく学んでいただきたいと考えています」(服部先生)

次いで、近森病院薬剤部部長であり、高知県病院薬剤師会常務理事を務める筒井由佳先生が同院の実習の特徴を話す。

「急性期病院である当院での実習はチーム医療にて、とにかく患者さんの治療現場に参加していただくのを第一義としています。

他の職種との密な連携や、カンファレンスを通じた薬物療法への参加などを体験し、地元の病院で医療に従事するのが、いかにやり甲斐があるかを実感してもらうことをめざしています」

高知大学病院の実習の特徴については、同院薬剤部薬学教育担当専門員の楠瀬正彦先生が次のように説明してくれた。

「当院の実習では、薬剤師の職能を

#### 【資料1】実習受け入れ施設と実習生数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
病床数(床)	355	424	351	676	178	607	150	172	468
薬剤師数(人)	15	10	25	26	7	28	6	4	16
受け入れ実習生数(人)	7	8	15	15	2	24	2	2	15



高知大学医学部附属病院薬剤部部長／  
高知県病院薬剤師会会長

## 宮村 充彦先生

広げられる体験ができるよう努めています。臨床の現場ではどうしても医師や看護師の判断に頼らざるをえない場面がありますが、薬剤師が自分で考え、積極的に医療にたずさわると醍醐味を実感してほしいですね。

たとえば、当院の実習ではフィジカルアセスメントを体験してもらうために、高知大学医学部看護学科の基礎看護学の実習に参加するなど、より実践的に医療へ参加する場面を用意しています」（楠瀬先生）

## モデル・コアカリキュラムには共通したベースが必要

“ふるさと実習”のあるべき姿について、市原先生が指摘する。「“ふるさと実習”が薬学生にとって魅力あるカリキュラムであるには、まず参加施設すべてに共通する、モデル・コアカリキュラムに準拠して標準化された実習内容があり、その上に施設ごとの特徴がある構造になっている必要があるでしょう。高知県病院薬剤師会は薬学教育研修委員

会が中心となり、標準化とレベルアップを常に模索しています。

ベースのレベルアップと施設ごとの特徴が相まって、高知県の“ふるさと実習”の魅力となり、『高知県で医療に従事したい』と考える薬学生が増えていってくれることを心から願っています」（市原先生）

楠瀬先生がそのお話に、大きくうなずく。

「各施設が4～5名程度の人数を受け入れ、モデル・コアカリキュラムに準拠したベースの部分から、各施設の特徴的な医療までを体験できるのが“ふるさと実習”の大きな特徴ですが、加えて施設間の連携がとめても密であることも臨床の現場を通して実感できるはずです。高知県の地域医療が多くの施設の協力で成立している様子も知ってもらえるでしょう」（楠瀬先生）

“ふるさと実習”が薬学生にもたらす効果について、市原先生がつけ加える。

「生まれ故郷の言葉が飛び交う中で

医薬品の情報を通じて、患者さんのために生き生きとした医療が実践されている様子に触れるだけでも、薬学生にとっては良い経験になるはずですし、目が開かれることが多いはずです」（市原先生）

## 薬剤師の可能性を広げる“ふるさと実習”の今後

服部先生もベースの大切さについては強調する。

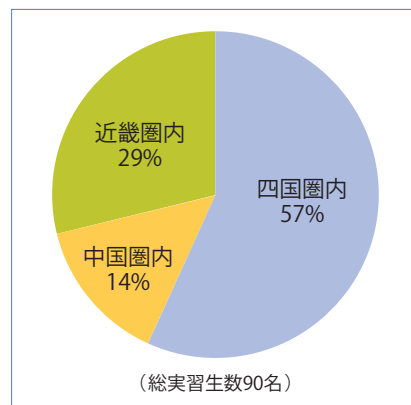
「どの施設で実習を受けても、高知県内の病院に勤務した際に共通して通用するベースが学べるものであるよう、私たちは日々カリキュラムの充実に努めています」（服部先生）

“ふるさと実習”、ひいては実務実習の今後について、さらに積極的な見解が提示された。

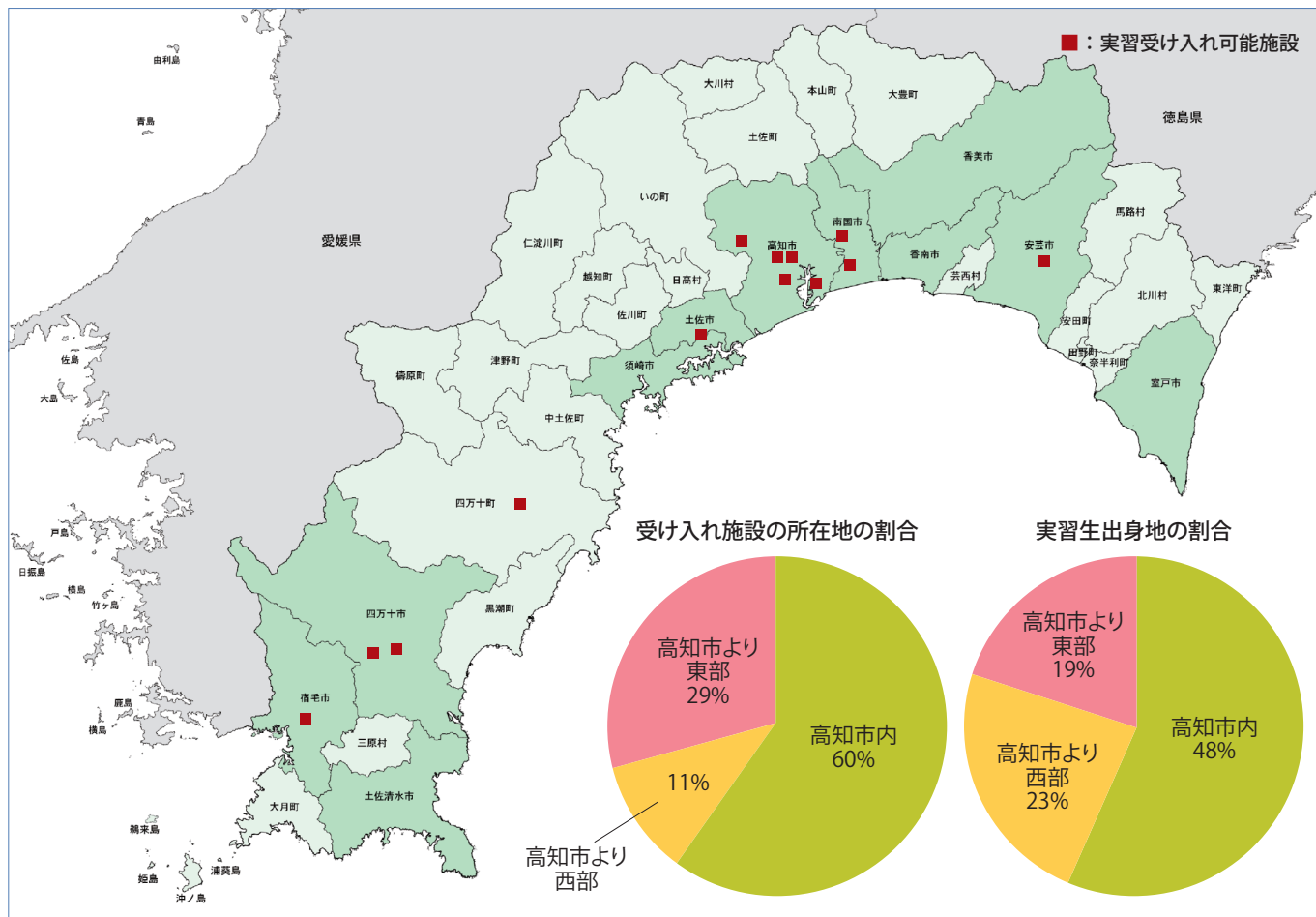
「実務実習が臨床に偏ってしまっただけでは、病院薬剤師業務への理解を誤らせてしまう懸念があります。特に私は、病院薬剤師の活躍の可能性はきわめて広く、多岐にわたると確信します。

たとえば創薬。薬剤師は今以上に治験などで大きな役割を担えるでし

【資料2】実習生の在籍する大学所在地の割合



【資料3】高知県の実習受け入れ可能施設の所在地と実習生出身地



よう。また、製剤にも薬剤師の業務の魅力として奥深い側面がありますから、実習の現場でこれまで以上にこれらを体験する機会を増やしていきたいと考えます」(宮村先生)

製剤業務の話題を受けて、服部先生が追加をしてくれた。

「新しい薬剤が導入された際、中には添付文書を読むだけでは“モノ”として薬剤を扱う風潮があるようで危惧を感じます。製剤業務を通して薬剤の添加物がどうなっているかまでなどを知り、考えることは、薬剤師が薬物療法の分野で活躍するうえで、大きな力になるのは明らかです。その経験の舞台としては、大

学病院に大きな役割を期待します」(服部先生)

製剤業務を通して、臨床の力もつくという考えには、筒井先生も賛同する。

「薬物療法のツールとしての医薬品という考え方、発想は、臨床現場において計り知れないほどの応用力につながります。製剤業務に関する宮村先生、服部先生のお考えに賛同します」(筒井先生)

最後に、宮村先生が病院薬剤師の今後と、高知県の医療の今後について見解を示してくださいました。

「病院薬剤師の業務は、調剤室から出て病棟に広がりましたが、この先

には外来への進出、在宅医療への進出が待っているのは間違いありません。我々は薬科大学、薬学部のカリキュラムに呼応しながらそういった薬剤師の未来像の実現に貢献すべき実務実習、“ふるさと実習”を、常により良くレベルアップしていく努力を惜しみなく続けるつもりです。

薬剤師の高齢化が進み、地域偏在も深刻な高知県にひとりでも多くの薬剤師が帰ってくるために“ふるさと実習”が果たす役割はこれからますます大きくなるでしょう」(宮村先生)

【資料1～3】：高知大学病院より